

ある日のベントン先生とのお話

服部 知彦

Sea Phone Co., Ltd.代表

SeaPhone@att.net

出会い

ベントン先生と私との出会いは、1992年モントリオールで開催された”The 1992 International Conference on Three Dimensional Media Technologies”でした。同じセッションでベントン先生の次に私は講演しました。私の講演直後、先生はちょっと驚いたような顔をされ私に声をかけてくれました。そして、「分からない部分があるので、また後で…」と言われたように思いました。この会場には浜崎先生や羽倉さんもおられ、翌日の朝食時、ホテルで浜崎先生から、「バックライトにこんな使い方があったとは…」と言われ私はとても嬉しく思ったことを覚えています。結局ベントン先生とお話する機会はありませんでした。私はそれ以後も実用化のための3Dディスプレイの開発を進めながら、その経過を3Dカンファレンスや3Dフォーラム、また海外ではSPIEなどで発表しました。それらの会場においてベントン先生の周辺にはいつも多くの人っていて、やはりお話できる機会は殆どありませんでした。一度だけ、私と学生たちが小雨降るサンノゼの街を、傘をさして歩いていると、偶然ベントン先生お一人と鉢合わせしました。その時、先生は親しげに「日本人は雨に濡れると溶けちゃうのかな?…」と言って何処かへ傘も差さず去って行かれました。

| | |
|--|--|
| 9:00 ~ 12:30 | |
| Session 5: Holography and Autostereoscopic Displays | |
| 4-3 5-1 | A Case Study of "The Clear Day Hologram" - <i>Stephen Leafloor, (Starlight Holographic, Kanata, Ontario, Canada)</i> |
| 5-2 | Developments in Embossed Holography - <i>Ed Diatrich, (American Banknote Holographics, USA)</i> |
| 5-3 | Production of Canada's First Holographic Stamp - <i>Dean Karakasis, (Canada Post Corporation, Ottawa, Ontario)</i> |
| 5-4 <i>Chair</i> | Interactive Holographic Video Imaging - <i>Stephen Benton, (M.I.T. Media Lab, Cambridge, USA)</i> |
| 5-5 | Progress in Autostereoscopic Display Technology at Nagoya University College of Medical Technology - <i>Tomohiko Hattori, (Nagoya University, Japan)</i> |
| 5-6 | OmniView™ Volume Visualization Display - <i>Darold Smith, (Texas Instruments Inc. Dallas, USA)</i> |
| 5-7 | PHSColograms: Past, Present & Future - <i>Ellen Sandor and Stephan Meyers, (Art)ⁿ Laboratory, IIT, Chicago, USA)</i> |

ベントン先生との最初の出会い 1992年11月5日モントリオール、カナダに於いて

数年後のある日

ニューヨークからボストンへの空路、当初の予定よりずいぶん遅れてしまっていました。前日豪雪のため、ジョン・エフ・ケネディ空港で足止めを食らった上、宿泊した高級ホテルの目覚し時計の am と pm が逆にセットされていて、朝目覚しが鳴らず、再予約した便にまで乗れず、キャンセル待ちでようやく搭乗できたのがこの便でした。

空港に到着後急いでMITメディアラボへ急行。あまりに急いでいたのでその間の詳細は記憶に全くありません。約束の時刻は 4 時間くらい過ぎていたのですが、ベントン先生は「ここ冬のボストンではよくあることだ。」と言って笑顔で迎え入れてくださいました。

この一ヶ月ほど前、ベントン先生から「今、服部がアメリカで暮らしているのなら、一度メディアラボへ来ないか？頼みごともあるので…」という e-mail を受け取り、先生とMITのディアラボでお会いする事になったのでした。

一通りベントン先生の案内でラボを見学した後、大学院生に対しバックライト分配方式ステレオディスプレイの原理についての講義を頼まれ、比較的人数も少なかったので紙とホワイトボードで講義しました。ここでびっくり！その時までこの原理を軽いディスカッションで理解されたと私が感じたのは、浜崎先生と日大の吉川さんだけでした。このラボの大学院生はこの原理を一発で理解し、またその時に私が説明を手書きした紙と、そこに日付と私のサインを求めてきました。それで私は日付と共にサインをし、その紙を彼に喜んで謹呈しました。その直後ベントン先生は学生やスタッフとアイコンタクトを取られたのを覚えています。ここまでは、Welcome to Media Laboratory という感じで、あまり話らしい話はありませんでした。

その後 Union Oyster House でディナーを二人でとることになりました。ワインの乾杯の後、この店はボストンで最も古く歴史あるレストランである事や、奥の席がケネディー大統領夫妻のお気に入りの席であった事などを教えてくれました。ロブスター、ボストン蟹や生牡蠣などの食事が出てくるまでの間、先生の研究やなぜ先生が 3D に興味をもったかなど、幼少の頃のお話や、ご自分の車のナンバープレートの番号はDDD (勿論 3D の意味ですが) 等々のお話がありました。そこで先生が私に強調されたのは、先生のホログラフィーに関する研究の主目的は、あくまでも立体映像の創出であるとの事でした。そして、先生は今日ラボで見てきたステレオ(二眼)ディスプレイの研究の遅れを嘆いておられ、「君が見た通り“primitive”(原始的？幼稚？)すぎる。君の進めている究極のステレオディスプレイの研究開発をラボでやってくれないか？」と言われました。先生いわく、MITは大学教官経験者にはとても“Warm hearted”に対応するので、メディアラボの教授にならないかという事でした。雇用形態はどの様にでも合わせるが、条件はボストンまたはその近郊に居住する事で、研究資金の提供者たちはそれを要求するとの事でした。実は当時私は、G-7 パイロットプロジェクト(日米遠隔通信先端実験)の成功を機に日本人 2 名と米国人 2 名の 4 名で Sea Phone Co., Ltd. を設立したばかりで、この会社の米国オフィスがノースキャロライナ州にあったのでした。その会社の事と、取締役の一人がステレオグラフィックスで有名な David. F. McAllister で、私の古くからの友人でもあることを、まずベントン先生に説明しました。するとベントン先生は、アメリカにおいてステレ

オ関係者は変な人が多い、そういった人々は大抵少し発明をするとすぐ大金持ちになれるとか、なることしか考えないと嘆いておられました。しかしその中で Prof. McAllister はステレオ分野で初めて数学的アプローチをしたアカデミックな人物であり尊敬もしていると褒め称えました。先生は私の話を途中でさえぎらず最後まで聞いてくださり、いつも笑顔でとてもゆっくり話をされ、また褒め上手でした。また “Warm hearted” をとても多用されていました。先生の人柄に魅了されながら程よい酔いに包まれる事数時間、結局私は「私個人としては前向きに対応したい。」と言う結論に至りました。

ベントン先生は既にMITの人事に対応されていて、私がローリーNCに帰った時にはMITの人事担当からe-mailで幾つかの雇用に関するオプションが届いていました。約1ヶ月悩んだ末、先生にはとても申し訳なかったのですが、当時の諸々の事情でお断りする事になりました。その際にも、先生からは「会社を創ったばかりで大変な時期だから仕方が無いね。」とだけ言っていました。



ケネディー大統領夫妻専用の席

悲報

その5年後、先生が故人になられた事を、日本で知りました。
悲しさと寂しさと、心残りと言うか忘れかけていた申し訳無さが一度に私を襲いました。

そして、今

数年前3Dブームの頃、私達3Dの専門家の多くは少なからずその家電の3D表示方式のレベルの低さを冷ややかな目で見ていました。今回、ベントン先生を回想するにしたがい、もし先生が生きておられたら、きっと“Warm hearted”に対応されていたに違いないと感じました。そして3Dブームが去った今、この10年私は何をしていたのだらうと思います。15年前、ベントン先生と語り合った究極のステレオディスプレイや、先生の3Dに対する究極のテクノロジーの創出という熱意や、それに携わる人々に対する先生の誠意が、先生没後10年のこの節目に改めて思い出されました。

そして私の記憶の中の先生は私が近年忘れかけていた3Dに対する熱意とその頃抱いていた高潔な志を呼び覚ましてくれました。先生の志を未来に繋ぐため、私は私が今できる事を新たに始めます。

終わりに

「有り難う！ベントン先生。」

謝辞

ベントン先生の10周年の回想(ベントンメモリアル)に私と私から見た先生の思いを述べる機会を与えてくださった、橋本 信幸(HODIC会長)、羽倉 弘之(三次元映像のフォーラム:代表幹事)両氏に心より感謝いたします。